



▲小麦粉とおからの生地ペースト状にした大根を練り込み揚げた「小高だいこんかりんとう」。サクッとした食感にほんのり大根の風味がするシンプルな味。「プレーン（写真）」のほかに、「胡麻入り」もあります（それぞれ1袋280円）。「道の駅南相馬」で販売されています。今後はインターネットでの販売も視野に入れているとのこと。

域貢献・地域活性化を目的に、学校独自の商品開発を行ってきた商業研究部の部員たちです。

「第一号となる商品ができたのは二〇〇七年で、当初は三年生の授業の中で『課題研究』という形で取り組んでいました」と話すのは、現顧問の中島裕先生。その記念すべき商品第一号が「小高だいこんかりんとう」です。これは、小高区金房地域の特産で首都圏などへも出荷されていた「金房大根」が、当時収穫が多すぎたり規格外だと廃棄処分されていた現状を知った生徒たちが、「何とか有効活用できる方法はないか」と考え、開発・商品化したものです。

その後も「ぶろっころり麺」（二〇〇八年）



WE LOVE ふくしま



現役商業高校生たちの奮闘

地域貢献・活性化を目指してさまざまな商品開発を行う、
小高商業高校商業研究部

南相馬市の小高区にある福島県立小高商業高等学校。小高区は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により警戒区域に指定され、同校の生徒たちも避難や転校を余儀なくされました。震災のあった二〇一一年度は、福島市の福島商業高等学校と相馬市の相馬東高等学校の二校に分かれて避難。今年度は同じ南相馬市内の原町区にある原町高等学校へ移り、ようやく全校生徒揃っての学校生活を再スタートさせることができたという状況です。

こうしたなか、「地域のために何か自分たちにできることはないか」と考え、行動を起こした生徒たちがいました。震災前から地



▲商業研究部部長の松本有香さん

や「トマト・味噌生キャラメル」(二〇〇九年)など、地元の野菜を使った商品を次々に開発。中島先生は「せっかく開発した商品を後輩たちに引き継ぎながら、新商品の開発にもチャレンジしたいという生徒たちの想いもあり、二〇〇九年度に創部して部の取り組みとして再スタートしたんです」と、振り返ります。そうして二〇一〇年には「さつまかりん」「いもきんつば」「アスパラアイス」の三品の開発に取り組み、翌年(二〇一一年)三月七日には「アスパラアイス」の販売会を開催しました。

その四日後に、東日本大震災が発生したのです。

「小高だいこんかりんとう」と福島県産農産物のPR活動

現在、商業研究部に所属する七名の生徒たちも、仮設住宅や親戚の家での避難生活を余儀なくされています。こうした状況に置かれているにも関わらず、「いま自分たちにできることから始めよう」と考えた生徒たちは、まずは地域の現状を把握しようと、福島県観光物産交流協会やJAそうま、道の駅南相馬、JA新ふくしまなどを訪問。その過程で、福島県全体に広がる深刻な風評被害を知りました。部長の松本有香さんは「放射性物質や農産物の検査に関する正確な情報とともに、出荷されている商品は大丈夫なのだというこ

とを県外の方々に伝えなければと思いました」と話します。

そのために街頭でアンケートを取ったり、自分たちで調べた調査情報や県が発信している情報を載せたリーフレットを作成したりもしました。「ただPR活動をするだけではなく、あわせて福島県の農産物も販売したかったのですが、コストや消費期限が短いなどの問題がありました。そこで部員たちで相談した結果、加工品を販売することになり、これまで私たちが開発してきた商品の中から『小高だいこんかりんとう』を選んだんです」と松本さん。

部員たちはまず、大根の仕入れ先を確保するため、県内のJAに当たりました。小高区の大根は作付け制限を受けて使用できなかったことから、旬の時期に合わせて会津産、郡山産、福島産の大根を使用することにしたそうです。

また、かりんとうを製造してくれる会社への確認も行いました。中島先生は「宮城県の女川町に『おからかりんとう

う』を製造する会社があり、震災前はそこをお願いしていたんです。今回の震災でその会社も被災していましたが、震災後は鳥取県に工場を移し営業を再開していたということもあって、『小高だいこんかりんとう』の再製造をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました」と、しみじみ語ります。

自分たちの開発した商品を地域のために活かしたい

生徒たちのPR活動は、昨年の夏から今年二月にかけ県内外で実施。高校生対象の物産展や文化祭、テレビ局のイベントに参加するなど積極的に活動しました。松本さんは、『地元で『小高だいこんかりんとう』の販売活動をしたときに、『テレビ見たよ、懐かしいね。頑張つて』と声を掛けられたことが、とてもうれしかったです』と、活動を振り返りながら笑顔を見せます。

小高商業高校商業研究部のそうした風評被害を払拭する取り組みは、研究発表資料にまとめられました。この発表資料は、二〇一二年八月に郡山市で開催された「東北六県高校生徒商業研究発表会」で第二位の評価を受け、同年十一月には徳島県で開かれた全国大会にも出場しました。

「今回の活動を通して、風評被害の問題は県外だけでなく、県内にもあると実感しました。アンケートの結果を見ると、県内の方が福島農産物を購入することに慎重であることが分かったんです。今後は、県内の方に向けたPR活動も積極的に行っていきたいです」と、松本さんは活動に意欲を見せます。その言葉どおり、十二月に催された福島県観光物産館での販売会では、部員七名が全員で物産館を訪れるお客さまに声を掛け商品をPR。売場は盛況で売り切れになった商品も出たほど。先輩たちの取り組みは後輩たちに受け継がれ、小高商業高校ブランドの商品として着実に地元根付いていくことでしょう。



▲ 12月22、23日に福島県観光物産館で開催された販売会の模様